

泡になる街

佐竹紫円

泡として消える定めのもとにある魔法の街を旅人はゆく

人影のない街まばらに点く灯り 風にはほのかに涙の残り香

ふと声が聴こえた気がして旅人は立ち止まる 街灯がゆらめく

路地裏で出会った少女は旅人の記憶の少女にどこか似ていて

儚げに少女は微笑む諦めはもう通り越した清らかさで

「あと少しで私も消えてしまうけどそのとき光になるんですって」

諦念は強さと隣り合わせかもしれない旅人はただ静かに頷く

あ、と少女は呟いた その時が来たことを受け容れるように

淡い光を放ちつつ音もなく少女は泡へと変わってゆく

さよなら、と少女はわらった 言葉にはできない透明なうつくしきで

あのとときの少女だとすれば届けたい言葉があったのに それなのに

街並みがゆらめき泡になってゆく ああここはもう、この街はもう、

泡はただ空に向かって消えてゆく音でなく光を放ちつつ

長く静かな息を吐き旅人は羊皮紙にこの記憶を記す

その文字も泡として消える定めだと彼が知るのはこのずっと後